

演題

「根尖を越える骨欠損や骨縁上欠損に対する歯周組織再生療法応用の可能性」

「The potential to apply periodontal regeneration to bone defects beyond the root apex and supra-crestal periodontal regeneration」

氏名 北島 一

抄録

歯周病が進行すると、支持骨が失われ歯の機能低下が起こり、同時に深い歯周ポケットの存在から、歯周病にさらなる進行が避けられない状況となり、歯の喪失へと向かうことになる。さらには歯周病の進行に伴い辺縁歯肉の退縮や、歯間乳頭の退縮が起こり、審美障害も同時に引き起こされることが少なくない。

骨縁下欠損に対しては、それが根尖を越えるような深い骨欠損であったとしても歯周組織再生療法によって良好な治療結果を期待することができることが知られており、骨支持の増大、歯周ポケット深さの減少によって歯の予後を改善することができる。しかし審美性に関しては歯間部の付着が喪失し歯間乳頭が失われている場合、再生手術後、歯肉退縮が悪化しないように慎重に手術をすることに注意が向けられてきた。またこれまで骨縁上の歯周組織の再生は不可能であると考えられてきたため、歯間乳頭の再建のためには、歯の挺出を行うことで付着位置を歯冠側に移動するなどの対策を講じる必要があった。

しかし付着の失われた歯間部組織に対し歯間乳頭を切開しない NIPSA (Non-Incised Papillae Surgical Approach) や EPP (Entire papilla preservation technique) などの手法を応用することで、組織学的には再生は得られていないと思われるが、臨床的に歯間乳頭の再建や Cairo の RT3 に対する露出歯根面の被覆を成し得た症例を経験するようになってきた。今回それらの症例を提示し、歯周組織再生療法の可能性について考察したい。

【略歴】

1987年 広島大学歯学部卒業

1990年 静岡県磐田市 北島歯科医院開業

2008年 5-D Japan (石川知弘、福西一浩、船登彰芳、南昌宏らと) 設立

【所属】

日本口腔インプラント学会専門医

日本臨床歯周病学会認定医

European Academy of Esthetic Dentistry (EAED) Affiliate member

静岡県口腔インプラント研究会 理事

日本歯周病学会会員

演題

Collaboration Perio and Ortho

氏名 金成 雅彦

抄録

日常臨床において矯正治療と歯周治療を併用せざるを得ない症例にしばしば遭遇することがある。両手技を応用することで、お互いの治療効果をよりアドバンスな治療結果に結びつけ、患者のQOLの向上に結びつけることが可能となる。矯正治療後の歯肉退縮を経験した術者も多く存在するだろう。歯列を無理に拡大することによってボーンハウジングから歯列が逸脱し、経年的に歯肉が退縮してきたと相談されたこともある。まずは歯肉退縮を惹起しない矯正治療を心がける必要性を感じる。また、リグロスの臨床応用により、その治療結果には驚きを隠せない。歯周再生療法にリグロスを応用することにより、骨吸収の改善のみならず歯間部乳頭組織の改善も可能となったと考えている。近年、乳頭部切開を入れないNIPSA、M-VISTA、EPPTが注目されているが、今回の講演においてはリグロスを応用したNIPSAと矯正治療を応用した当院における症例を供覧させていただきながら、今後の可能性についても言及させていただきたい。

略歴

平成3年 九州歯科大学卒
平成7年 防府市にてクリスタル歯科開業
平成23年 歯学博士取得

所属

IPOI 学会指導医
日本口腔インプラント学会専門医
日本臨床歯周病学会認定医
顎咬合学会認定医
米国歯周病学会 (AAP) 会員
米国インプラント学会 (AO) 会員
日本審美歯科協会会員
OJ 会長
JUC 副会長
ARM's 主宰

演題

『Phenotype Modification Therapy』

氏名 中田 光太郎 Kotaro Nakata

抄録

この新しい治療の概念並びに有効性について2020年 Barootchiらは、天然歯における歯肉フェノタイプの修正療法について、同様に Tavelliらはインプラント周囲における歯肉フェノタイプの修正療法について、それぞれシステマティックレビューを発表している。

治療法自体は従来より多くの臨床家によりケースシリーズとして提唱されている。例えば歯肉造成術（Gingival Augmentation）として Zuhrらは、露出歯根を被覆する、軟組織を安定させる、歯肉退縮の進行を抑制する、歯内療法後の歯根の変色を遮蔽することなどを目的に行う処置としている。もう少し具体的には補綴物のマージンを歯肉縁下に設定する必要がある場合、軟組織の安定と歯肉退縮予防のために有効な処置であり、また矯正治療においても薄い Periodontal Phenotype を持つ患者や、歯根を唇側方向に移動させ歯槽骨の裂開を生じるような動的治療が必要な患者への歯肉退縮の予防処置として行われるとしている。

インプラント修復治療においても、審美的、機能的な問題を引き起こし、これを回復することはペリオドンタルプラスチックサージェリーの中でも難易度の高い処置である。したがって、とくに術後歯肉退縮を生じるリスクが存在する場合、術前に歯肉を予防的に厚くして、治療の結果を成功へと導くことは理にかなった処置である。

今回は、『Phenotype Modification Therapy』について、長期経過症例もご紹介しながら、その有効性について考察したい。

演題

Orthodontic perspective of treating periodontally involved dentition

氏名 Sabrina Huang(黄 瓊)

抄録

The number of adult patients seeking for orthodontic treatment is increasing significantly. Hence, the importance of “synergy” between periodontists and orthodontists cannot be overemphasized to enhance treatment efficiency and efficacy of periodontally involved dentition. In this presentation, orthodontic strategies to increase connective tissue support and alveolar bone height as well as control of pathologic occlusal trauma will be discussed.

略歴

1999年 中山医学大学歯学部卒

2004年 成功大学口腔医学部矯正専攻課程

2012年 台湾、台南で Big Apple Dental Clinic 開業今に至る

2014年 Taipei Smile Dental Clinic 矯正専属

中華民国歯顎矯正学会認定医

中華民国審美歯科協会認定医

日本審美協会会員

日本顎咬合学会認定医